

ほな、歴史通信

第81号

2016. 12. 1

合併後、二十年の歴史を考える

今年は、戦後(昭和二十年八月)から数えて七十一年目を迎えるが、この戦後の歴史をまとめ、振り返ることが求められている。ここでは、昭和三十年に一町八か村の合併により新大子町が誕生し、新しい「町づくり」に努めていた二十年間、当時の町長や町議会議長がどんなことを考え、町の施策を行ったのか考えてみよう。

大子地方の合併案に、大子町、上小川村、生瀬村の案があったが、昭和三十年三月、一町八か村の合併により新大子町が誕生した。農業と観光を軸にしてその発展を図り、それを通じて住民の福祉の向上を実現する、これが描かれた町の将来像であった。

昭和三十四年一月、八代保町長は、「大大子町も、いまだ建設の途上にあり、…産業開発に、文教の面に、交通施設にと、…実現を計り、私の常に主張して居る明るい、楽しい、豊かな大子町を実現したのであります」と述べている。

昭和三十七年一月、国谷順一郎町長は、「農業と観光は、町づくりの二つの柱でありまして、温泉郷を中心とした観光の開発と、農業の振興発展こそ、いよいよ推進しなければなりません。…農業は大きく転換しようとしております。即ち畜産、果樹、園芸、特産物等への重点的施策こそ重要な課題であります。さらに、…文教施設の充実と産業、経済、文化の動脈である道路、橋梁の整

備、これらいわゆる総合開発も重要であり、町民の福祉につながる」と述べ、木沢源蔵議長は「農業関係にありましては和牛、乳牛、果樹、茶、こんにやくを重点に、また、観光においては、袋田、大子、矢祭、湯沢を結ぶ奥久慈温泉郷の開発促進のほか、道路関係では、大子黒羽線、大子氏家線および日立大子線の整備その他久慈川流域の治山治水事業も…実施される」と述べる。

昭和四十五年一月、国谷町長は、「懸案の統合中学校の建設をはじめ、農林業構造改善事業、町道農道の整備、簡易水道の敷設等、町発展の基盤づくりが推進され、また近時重大な社会問題とされている交通安全対策についても、交通指導員を置き、救急車の設置も実現し、四月からは消防署も発足…また、年々人口が流出していゆる過疎化が生じつつありますが、この対策として工場誘致等を積極的に推進いたすべく、ただいま進行中のものも二、三あるわけであります」と述べる。

昭和四十八年一月、国谷町長は、「全国植樹祭当町開催が内定するという朗報がありました。こんにやくの一昨年につづいての高値、木材の高騰など、町経済は活況を呈するという状態であり…中央公民館や町民プールが完成し、町史編さん委員会が発足するなど、教育文化の面でも画期的な年でありました」と述べる。

昭和四十九年一月、国谷町長は、「本年は秋にはいよいよ茨城国体が開催され、…奥久慈の山々を会場に山岳大会が行われます。…町づくりとしては、本年は上・下小川統合中、生瀬中体育館、依上保育所等をはじめとして、町道農道の整備、町営住宅の建設、簡易水道の整備等を推進し、田園都市計画、自然休養村計画、土地改良の事業等を実施し、教育を振興し、社会福祉の向上をはかり、生活環境の整備、産業の振興等を重点目標に、住みよい豊かな町づくりに邁進する所存であります」と述べている。

その歴史を考え、様々な角度から再発見、再評価することは、ふるさとへの愛着と誇りを育むことになるであろう。(野内正美)

大子盆地の形成と断層活動

笠井勝美

茨城の県南地方の地下深部には、日本列島を縦断する中央構造線が延びています。中央構造線は一千キロメートル以上に及ぶ日本最大の断層で、西端は熊本県にまで達しています。紀伊半島以東では、現在活動は休止していますが、西端の熊本地方では活動が活発化して熊本地震から三ヶ月も余震が続いています。地震予知と言われていますが、ほとんど不可能に近いと言われています。

一 大子町の断層

私達の住んでいる大子町にも前期白亜紀(約一億年前)と中新世代(約一千万年前)の二度活動した大きな断層があり、現在は活動を休止しています。大子町を走っている断層を大きな順から五ヶ所紹介します。

- ① 棚倉破砕帯西縁断層、高倉と大子町との境の取上峠から大子町高柴を通り、矢祭山関岡に達する断層
- ② 八溝山塊の東縁、大子町初原の恵場ヶ沢から宮本を通り、高田南から長崎に至る断層
- ③ 頃藤断層、上小川長福から高部に至る断層
- ④ 黒羽断層、栃木県大田原市黒羽から大子町槇野地釜の口に至る断層
- ⑤ 大子町上岡大平から浅川を通り、上郷に至る断層

二 大子盆地の形成

茨城の県北地域には棚倉破砕帯という一級の断層が走っています。前期白亜紀には断層破砕がおこり、その後中新世の海進によってかなり厚い地層が海中に堆積しました。その後中新世末期に

左横ずれ断層が再活動し、①の活動によって西方の八溝山地は南方に移動してずれ、②の断層が出来ました。①、②の断層活動によって大子盆地が形成されました。その後、新生代のはじめに⑤の断層の左横ずれ活動によって大子町西部の依上方面の平地が形成されました。このような堆積した地層が断層活動によって平地として形成され盆地になったものは、プルアパート堆積盆と呼ばれています。

三 左貫小盆地の形成

大子町左貫の盆地は、④の断層の左横ずれ活動によって前期白亜紀に形成されました。このことは雲巖寺のチャート層が左貫の花室神社につながり、須賀川の如来沢のチャート層が槇野地百合ヶ平のチャート層につながることによって証明されます。左貫盆地の低地は、南方川上の谷の延長であったことも推定されます。この断層の活動時代は八溝山西縁の花崗岩の貫入以前の時代で、白亜紀以前であることが推定できます。

四 頃藤断層の時代

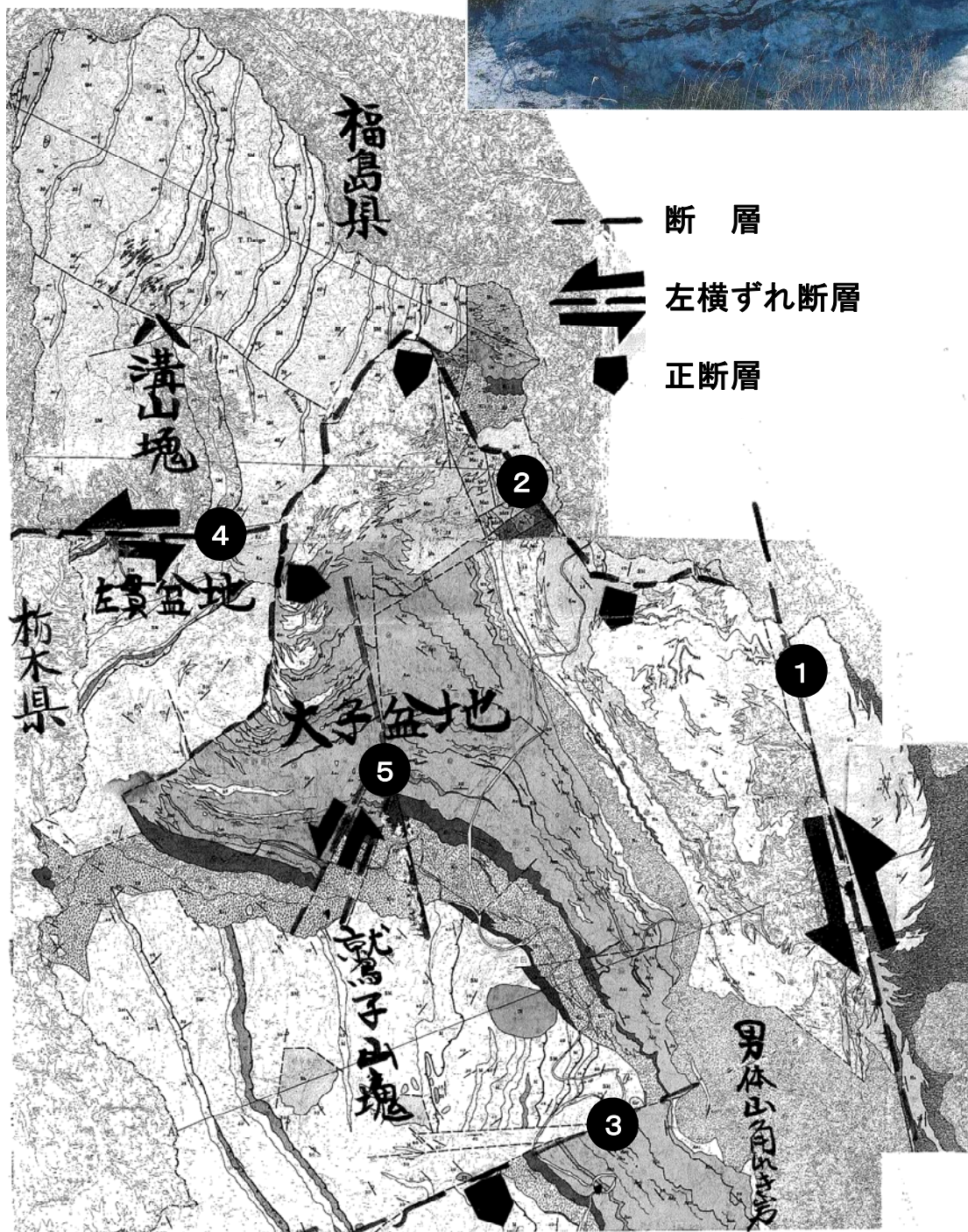
③の上小川の断層活動時代は、男体山火山の噴出時代の中新世(千六百万年前)で、南落ちの正断層と考えられます。この断層活動によって、男体山、白木山ができ、上小川の平地が形成されました。

引用資料

笠井勝美、大森信義、国土庁発行地質図(大子、喜連川)(稿)
阿久津正光 黒羽断層写真

(大子町山田在住)

左貫の黒羽断層 →



大子町城館跡探訪九

野内智一郎

依上地区の九つの城館跡を踏査し終えたため、今回は、これまでの城館跡の確認と金資源との関係をまとめることとする。踏査し終えた依上地区の城館跡は次の通りである。

- ① 相川館跡 (大子町 相川 字落合)
- ② 下金沢古館跡 (大子町 下金沢 字古館一四四二外)
- ③ 下金沢末城跡 (大子町 下金沢 字末城一〇六八外)
- ④ 女倉館跡 (大子町 下金沢 字女倉)
- ⑤ 依上城跡 (大子町 塙 字中城五六四外)
- ⑥ 鎌倉館跡 (大子町 上金沢 字堂向)
- ⑦ 八幡館跡 (大子町 上金沢 字小屋)
- ⑧ 館ノ沢館跡 (大子町 芦野倉 字館ノ沢)
- ⑨ 芦野倉城跡 (大子町 芦野倉 字御城二六七外)

この九つの城館跡は五つの大字の地域に分けられ、上金沢に二つ、下金沢に三つが所在する。特に注目されるのは、依上地区の中にこれだけの城館跡が遺されているその密集性と「金沢」という地名からも想定されるように金資源の存在である。

まず、城館跡の密集性である。城館の一つ一つの細かな年代の特定が難しい現状からは、同時期に機能したものでどうかを明らかにするのは難しい。しかし、中世に位置付けられる大子町の二九の城館跡の中で九つもの城館跡が依上地区で確認されているのは、その立地の特殊性によるものであろう。つまり、当地域は下野国と境界を接しており、下野方面への前線拠点として重要な役割を担っていたと考えられる。依上地区の城館跡の分布は現在の国道四六一号線沿いに立地しており、那珂川町(旧馬頭町)へ抜ける幹線道路路周辺に位置する。那珂川町馬頭地区は武茂郷と称され、古来より那須、

宇都宮、白河結城の各氏が相次いで支配し、戦国末期に佐竹氏が支配を確立する。佐竹氏転封の後には水戸藩領へと引き継がれるが、この佐竹氏の武茂郷への進出に際しては、白河結城氏、那須氏、佐竹氏による抗争が繰り広げられ、この一五〇〇年代の抗争に際して多くの城館跡が建設された結果、依上地区に城館跡が密集することになった可能性が高い。

次に金資源についてである。金鉱床は中世代末期(約六五〇〇万年前)に形成される。その後の海底隆起・浸食によって金を含む地層が地上付近に現れた所に金は産する。茨城県と栃木県の県境に南北に連なる八溝山地は黄金山とも呼ばれ、古くから金を産出することと知られていた。先述の那珂川町馬頭地区と今回城館跡を踏査した大子町依上地区はまさにそのような特別な土地であったのだ。これが抗争が繰り広げられた一つの要因と考えられよう。戦国時代の産金法は、古代より行われた砂金採取に加え、鉱山掘りであった。つまり、川床の土砂を掘って水洗し砂金を選び分ける方法と、山に坑道を穿って金を含む鉱石を取り出し粉碎・選鉱・精錬する方法の二つが併用されたことになる。鉱山経営の方法には間接経営(請山)と直接経営(直山)があり、佐竹領内でも二形態が確認されている。

大子町では九つほどの金山が知られているが、そのうち東山金山が依上地区に所在する。もともと、東山金山は文禄二年(一五九三)の佐竹義宣判物に「ひかし(東)山りう(料)所にてあたらしく金をほりいたすよし肝要候」とあり、中世最末期の開発を思わせるため、それまでは依上地区での産金は砂金採取によったと考えるのが妥当であろう。いずれにせよ、依上地区は立地的に他勢力との境界であることに加え、古くからの産金が想定され、それが城館跡の密集性と関係がある可能性が高いと考えられる。

最後に、茨城県内の金山研究は萩野谷悟先生がその中心になって進めておられ、事実として紹介した多くが先生の研究に依拠していることを明記しておく。

(水戸市在住)

茨城県北芸術祭を終えて

皆川敦史

茨城県北地域の日立市、高萩市、北茨城市、常陸太田市、常陸大宮市、大子町の六市町を舞台にした「KENPOKU ART 二〇一六 茨城県北芸術祭」が、十一月二十日に無事閉幕を迎えた。県北地域には、かつて岡倉天心や横山大観らが芸術創作活動の拠点とした五浦海岸やクリストのアンブレラ・プロジェクトで世界の注目を集めた里山があり、かねてから芸術祭の開催地としてポテンシャルを秘めた地域であった。里山や海、気候や文化、食、産業など県北の地域資源の魅力をアートの力で引き出し、新たな価値の発見や地域の活性化を図ることを目的に掲げた。芸術祭のテーマは、「海か、山か、芸術か?」。八〇組以上の国内外有名アーティストや芸術系大学をそろえ、県北の海や山の自然と対話する作品や科学技術を利用した先進的な作品が展示された。

大子町では、常陸大子駅前商店街や廃校、観光・温泉施設、袋田の滝など七か所が展示会場となった。昭和レトロ調の常陸大子駅前商店街では、空き店舗や通りの至る所に東京藝術大学の作品が展示された。また、メイン施設の麗潤館では、3Dプリントされた大子産漆の彫刻やしゃぼん玉のテクノロジー作品のほか、多くの招へいアーティストの作品が展示された。旧上岡小学校では、歴代の校長の肖像や児童の作品などが飾られた講堂に、漆黒の液体による静ひつな世界を生み出す作品が展示された。窓ガラスや学校設備などかつての時代の雰囲気そのまま味わえ、十分な存在感を示した。旧浅川温泉では、世界的建築家妹島和世氏の直径十メートルの鏡面のアルミで



旧上岡小学校講堂



旧浅川温泉

できた足湯が目玉となった。乳白色に反射するアルミの面と緩やかに揺れるお湯の面にそれぞれ風景や空が映り込み、不思議な景色が生まれた。袋田の滝では、観瀑台に向かうトンネルの天井に久慈川の流れを表現した光るオブジェが展示された。大胆なうねりがゆるやかに光り、色が変わり、滝の音と作品の光が相まった。

今回は、芸術祭と一緒に作っていくサポーターを地元から募集した。展示会場では、サポーターが身振り手振りによるおもてなしの一助となった。ある年配女性サポーターの説明は評判となり、その方を目当てに何度も訪れる方もいたという。

県北の各展示会場は、週末を中心に多くの人でにぎわい、来場者総数は目標の三〇万人を大幅に超え、最終的には約七十七万人になった。大子町では、折からの紅葉シーズンと重なり、芸術祭との相乗効果で約十七万人にも上った。芸術祭のパンフレットを手にした女性グループや学生、家族連れの姿が目立った。また、展示会場周辺の飲食店では、鑑賞の合間に立ち寄る来場者で行列になることもあった。地元商店主は「芸術祭を機に初めて来店する方も多い」と実感し、観光施設などの関係者は「芸術祭をきっかけに多くの方に施設を見てもらい、将来的な利用促進につなげたい」と意気込んだ。地域外から人々を呼び込み、地域住民も参加して盛り上げ、一時的に地域に活気が出たことは確かである。しかし、会期内だけでなく、芸術祭効果をどのようにその後に繋げていくかが重要である。地域住民が創造的になり、地場産業や生活に活かせないと本来の意味での地域の活性化にはならない。この芸術祭を契機に、町内におけるアートへの関心や理解が高まっていることから、アートを活かしたまちづくりに取り組んでいきたい。（大子町役場まちづくり課）

「高田久右衛門日記」に見る保内

安政二年（一八五五）、水戸藩領の主要な産物である蒟蒻を管理し、収益を得るための蒟蒻会所が袋田に設置されました。会所を通じた蒟蒻流通が盛んになった安政四年及び六・七年に、上方方面への蒟蒻の一手販売の特権を得るため、大坂高麗町一丁目の商人羽州屋高田久右衛門が保内を訪れています（高田久右衛門については『大子町史 通史編 上巻』五三七～五三九ページを参照の事）。この時に記された日記は、水戸藩の蒟蒻流通史を探る上での重要史料として著名ですが、同時に安政年間の保内を訪れた一個人の記録としても大変重要なものです。保内の生活史を知るための史料として、「高田久右衛門日記」を読み直してみます。

※以下史料引用文中の（ ）は著者補注です。

「保内の温泉利用」

久右衛門は度々保内で温泉を利用しています。安政四年九月二十二日には「湯澤□（ハカ）ツ半着、庄右衛門殿兼而河井氏より案内致シ置候二付、温泉湯焚入湯ス、日暮て御湯出ル」とあるように西金の湯沢温泉に入浴し、袋田村山横目の櫻岡家に滞在していた同年十月三日の雨の日には、同宿していた浅川村の藤田助三郎とともに「温水焚、湯（袋田温泉）二入」とあります。その他にも、同年十月二十三日や安政六年十一月十九日に袋田温泉利用の記事が出てくるように、外部から保内を訪れた人にとって、温泉は身近なものであったようです。

湯沢・袋田温泉ともに、温泉の湯を焚くという表記がされています。当時は温泉の泉温が低く、温泉を沸かす必要がありました。比較的温かい袋田温泉のお湯（明治四十三年の記録では泉温三四度）ですら、「冬日は風呂になさざれば浴しがたし」（「水府志料」と言

われるほどでした。湯沢温泉も管理のために、水戸藩から年六〇〇駄の楨が下されていました（加藤寛斎「常陸北郡里程間数之記」）。

「袋田村の小正月」

安政七年正月十四日に袋田村で行われた小正月の行事の様子が記されています。その日は、「水木樫の木にだんごさし、山桑二もちをなし」とあるように、新春や一年の豊作を祈る餅花の行事から始まります。夜に入ると、「鳥おい」という名の夜更かし行事が行われます。久右衛門によると、「村中子供等若もの女入交り、小家をかけ、中二而酒肴もち杯を焼、夜通し小うた雑うた手ひよし（拍子）二而夜明ス」と大変にぎやかなものであったようです。この日は行事食として、家毎に餅や豆腐を田楽にして食べました。

「蒟蒻と頃藤河岸」

久慈川水運は下野宮から始まりますが、大子地域は急流が多く、また浅底であるため、必ずしも水運に適しているとは言えないものでした。しかし、頃藤以南は川幅が広がり、小舟でなくとも通ることができるようになります（原南陽「紀遊保内」）。

袋田蒟蒻会所を通して出荷される蒟蒻は、久慈川を介して江戸・上方方面、奥州方面に出荷されていました。その荷物を船に乗せる場が頃藤河岸であったようです。久右衛門もその重要性を認識しており、従者の和助を度々「頃藤河岸改」に向かわせています。久右衛門自身も、西金・山方方面に向かう途中、頃藤河岸で「荷物川下ゲ」を行っています。

「高田久右衛門日記」は、金澤春友氏により水戸藩産業史研究会『会報』二号及び四号（水戸藩産業史研究会『水戸郷土研究』上巻、一九八二年刊行に再録）で紹介されています。

（藤井達也）

生瀬の乱の記事のある「近代諸士伝略」と

伊奈備前守没年の問題点(下)

高橋裕文

この諸家譜には常陸の一揆は出てこないし、その前の「寛永諸家系図」や伊奈忠次・頌徳碑にもそれはない所から見て、「近代諸士伝略」の常陸の一揆討伐の記事は編者の浅羽昌儀がおそらく巻頭言にあるように水戸藩家中の古老より聞いた話しを書き加えたものと考えられる。伊奈備前は車丹波の一揆鎮圧には関わっていないので、これが生瀬の乱の伝承を採集した最初の記事ということとなろう。さらに、諸家譜によれば高倉逸斎を迷わせた備前守叙任も慶長五年のことであり、常陸の一揆とは何の関係もなく、やはり高倉が最初に認定したように生瀬の一揆は慶長十四年(二六〇九)のことであった。

最後に、疑問として残るのは伊奈忠次が亡くなった年が諸家譜では慶長十五年であるのに対し、それ以前の諸士伝略や忠次・頌徳碑では慶長十九年となっていることであるが、これは水戸領後台村にあった源長寺の伊奈備前位牌でも同じく慶長十九年であり、単に「五」を「九」と間違っただけとは思えない。水戸領の年貢状から伊奈備前の名前が消えるのは慶長十五年からであり、慶長十五年死去は疑いが無い。川口市の源長寺は元和四年(二六一八)創建であり、後台村の源長寺は伊奈備前の代官新屋忠兵衛が伊奈忠次の菩提供養のためその戒名勝林院秀善源長にちなんで寺号を付け、常福寺一一代炎蒼証人により開基されたものである。とすれば、伊奈備前守忠次は生瀬の乱の翌年の慶長十五年に水戸領内で亡くなり、何らかの都合により幕府側(林羅山・鷲峰)や伊奈家が十九年まで四年間も死亡を伏していたことになるのではなからうかであれば、伊奈備前の死についても一般に知られたくないような出来事があったと考えざるをえないと言えよう。(那珂市在住)

私の太平洋戦争記(七)

野内泰子

私たちが言葉もなくその辺りを見回っていると、どこからともなく友だちが出て来た。お互い無事を喜んだが、家を飛ばされてしまった友達もいるとのことであった。けれども、友達は皆無事とのことでした。

その晩もまた、艦砲射撃があるから海岸の方へ逃げるようにとどこからか連絡が入り、夕方身の廻りの品をリュックに入れ、急いで炊いたごはんで作ったおにぎりをそれぞれが荷物の中に入れて、夕方まだ暗くなる前に家を出た。隣り組の人達が一団となり列を組んで黙々と松林の中をひたすら海の方へ向かって歩いた。昨夜降った雨のため松林の中の道はぬかるんでいた。海岸に近い方が砲弾が落ちる危険が少ないからと誰言うもなく情報が伝わり、松林が切れるあたりで夕食のおにぎりを食べた。下がぬれているので荷物を背負って立ったままである。ビニールなどという物はない時代であった。幸い、その夜は何事もなく、夜が明ける頃に家に戻った。こんな状態で学校に行けるのだろうかとか心配になったが、あと二、三日で夏休みになる時期であった。みんなで家に帰りつき、家の内外の片づけをしようとしている時、兄と叔父(母の実家の弟)が、Nさん宅に尋ねて来た。「勝田が艦砲射撃を受け、大きな被害を受けた」、「全滅した」等の情報があり、私の安否を尋ねる方法もなく、二人で自転車で生瀬から勝田まで駆けつけてくれたのである。挨拶を交わす間もあわただしく、私は兄の自転車の荷台に乗り、夜具や衣類なども二台の自転車に分けて乗せて勝田を立った。もうここに来ては、水戸も遠からず危ういことになるだろうし、取りあえず生瀬へ逃げた方が身の安全は図れるだろう、とにかく、一刻も早く田舎へということ、もう夕方

かったが、慌ただしくNさん宅に別れを告げて自転車に乗った。青柳あたりまで来たとき、もうすっかり夜につつまれ、これ以上は危険ということ、青柳の知り合いの家をたずねて一晩泊めてもらうことになった。大きな農家で、白いごはんに産みだての卵でもてなしてくれ、その晩は死んだように眠った。

次の朝、近くの青柳駅に行ってみると汽車が通っているという。そこで私だけが汽車で袋田駅まで帰ることになり、叔父と兄は、二台の自転車に荷物を積みかえて田舎を目ざした。袋田駅で合流し、また自転車の荷台に乗せられて生瀬に辿りついた。勝田の様子子が全くわからず、心配の極みに達していた母や祖母が、突然帰ってきた私達を見て言葉もなく立ちすくんだ。

学校の様子も心配だったが、夏休みの前だったのでしばらく休むしかないことを決めた。そして、八月二日未明、水戸空襲となったのである。この頃には、主要都市の大部分が次々と空襲を受け焼け野原となっていた。このことで先き行きは真つ暗となった。学校に帰る望みもなく、これからどうしたらいいのかも全くわからない状態だった。そして同月六日に広島、九日には長崎への原爆投下となった。その前日にはソ連軍が日本に宣戦布告し、ソ連軍が国境を突破してきた。

八月十四日、御前会議でポツダム宣言の受諾が決定された。翌十五日、天皇のポツダム宣言を受諾する旨が放送され、日本の降伏が決まった。ここに三年八か月に及ぶ太平洋戦争は終結したのである。

終戦を迎えてやっと、敵機におびえることも空爆に逃げまどうこともなくなった。黒い覆いを取り払い、明るい燈火の下で食事をすることもできるようになった。しかし、平和にはなったが私達の生活がすぐ良くなったわけではない。むしろ、このあとの数年間の窮乏生活の方が厳しく、想像を絶するものであった。

「もはや戦後ではない」と言われてから半世紀以上。私が子ど

もの頃、歴史の学習で日清・日露戦争について学んだとき、戦後四十年か五十年であった。だが太平洋戦争からも、はや七十年余も経とうとしている。それなのに、七十年余を経た今でも、あの戦争の記憶は薄れていない。当時、子どもだったから尚更、心に受けた痛みを忘れることができないのだろうか。天災は人間の力では如何ともしがたい。しかし、戦争は人災であり、避けることができるものだと私は思っている。世界中をみると、決して平和とは言えないところもあるが、人間の知恵を以て平和をつくり上げていく心構えは持たなければならぬと私は思っている。(完)

【参考文献】

『日録二〇世紀』講談社

『茨城県史 近現代編』茨城県

『水戸二高百年史』茨城県立水戸第二高等学校百年史編集委員会

(大子郷土史の会)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

野内 正美 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也 (大子町歴史資料調査研究員)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館 ☎ 0295 (72) 1148